

## 月船禅慧の人法について

笹尾 哲雄

近世鎌倉禅の始祖といわれる奥州三春の高乾院の月船禅慧については、これまで古月下とされてきたが、私は古月下でないことを、さきに論証した<sup>①</sup>。すなわち月船の授業師、北禅道济（梵秀）は、古月の法嗣ではなく、同名の北禅元貞（仙台資福寺）が「古月録」に出てくる北禅であることをつきとめた。

しかし月船の人法そのものについては不明のままであった。

それが、福島県田村郡小野町の今泉令子氏（小野町ふるさと文化の館職員）の「証心畧記」なる高乾院文書の写しの発見によって、このたび月船の人法が判明したので紹介したい。

「証心畧記」なる文書の全文は、次の如くである。

### 証心畧記

浄妙禅師心法传来之記

嘉永七年甲寅六月鎌倉円覚寺東海大和尚贈与

長沙義空禅師嗣法量山海証心西山亮住下総与倉大龍享保四年己卯十月三日転版妙心

前高乾梅嶽記

巴陵慈入禅師嗣法長沙住大龍享保六年辛丑九月十四日転版妙心

月船禅慧禅師嗣法東溪証心巴陵入住奥州三春高乾院享保廿一年乙卯三月三日転版退寓武州永田宝林寺創東輝庵  
為開祖天明元六月十二日示寂寿八十敕諡本覚浄妙禅師有武溪集二卷行世

昭和三年六月一日旧四月十四日三春高乾ニ於テ写之

これを見ると嘉永七年（一八五四）六月に鎌倉円覚寺の東海昌陵が三春の高乾院の二十七世で当時、閑栖であった梅嶽文蔚に贈った文書で、月船の法について記したものであることが、わかる。

すなわち月船は、下総（千葉県）与倉の大龍寺の巴陵慈入について参禅し、証心（大悟）したことが知られる。

「証心畧記」の写本は、小野町在住の月船の生家、秋元家から出たもので原本は、存在しない。昭和三年に、これを筆写した人物についても、わからないが、内容そのものについては十分に信用できる。

月船の師、巴陵は、「大龍寺略記」によると千葉県佐原市与倉の大龍寺（妙心寺派）の二十七世で、塩原の門前に生れ、中峯の延命地藏尊を開眼したという記述がある。

ところで巴陵という名前の出てくる史料は、私の知る限りでは、「白隠年譜」、月船の詩偈集「武溪集」、延慶道倫の「大応禅師玉洲和尚行録」<sup>③</sup>、定山の詩偈集「紙衣集」<sup>④</sup>、玉洲祖億編「定山寂而禅師年譜」<sup>⑤</sup>、「嘉永重撰正法山宗派図」（東海派）の六書である。

以下、この六書と巴陵の関係について考察し、巴陵の人物像について述べてみることにする。

「白隠年譜」果行格の宝暦十三年（一七六三）の条によると七十九歳の白隠が同年十二月に夢をみたが、夢の中には、愚堂、大愚、無難、正受、及び陽春、古月、巴陵、定山などの諸老が列座していたという。

白隠と巴陵の関係については詳しいことはわからないが、白隠二十七歳、佐倉の養源寺、宗円寺に掛錫時代の友人とされる。

「武陵集」坤には、月船が、かつての参禅の師、武陵を評した五言絶句一編が次のように記されている。

武陵和尚 在大竜寺

大竜実無眼。又不在澄潭。

何処笛声起。千峰色若藍。

また延慶道倫の編になる「大応禅師王洲和尚行録」の享保十七年（一七三二）壬子の条には、武陵について次の如く記している。

師四十五歳随喜隣刹大竜寺武陵和尚楞伽大会不懈一席矣

これによると武陵は、享保十七年（一七三二）自坊の大竜寺で楞伽経を提唱している。当時、四十五歳であった王洲祖億は、隣寺の関係から、この大法会に随喜して武陵の化を輔けたものらしい。

因みに王洲は、古月下で定山寂而の法を嗣いで下総の光福寺（千葉県佐原市寺内）に住した人である。

光福寺の王洲の師、定山の詩偈集「紙衣集」巻上には、「和慈入道友元旦八首」（大竜寺武陵慈入和尚八首）、「紙衣集」巻中には、「和大竜主人成道会香語三首」、「和大竜主人仏生日香偈」、「和大竜主人除夕」、「和大竜巴陵座元歳首十首 時陵和尚講楞嚴」、「大竜長沙空座元一周忌」（大竜巴陵入之先住）などと武陵に関係する詩偈が多い。

さらに「定山寂而禅師年譜」をみると享保四年（一七一九）の条に「留護三十余衆長沙巴陵仏日三老結伴昼三夜三 刻苦精進三老此時尚在学地」とあり、武陵が定山に請益していたことが知られる。

また「嘉永重撰正法山宗派図」（東海派）によれば天縦門派の項に次のように武陵の名が見える。

量山祖海—長沙義空—巴陵慈入—燈法暉

この法系は、さきに示した「証心畧記」の法系と同一であり、月船は、武陵の法嗣としなくてはならない。巴陵は、元文五年（一七四〇）七月四日、五十五歳で世を去った。

巴陵が当時、関東地方で禅風を宣揚した大宗匠であったことは想像するに難くない。

巴陵の法嗣には、月船のほかにも大龍寺を継いだ一燈がいるが、このほかに秋田の大悲寺十世、快山宗全も巴陵の印可を受けたと考えられる。巴陵が快山に道号の頌を付与したと記録にあるが現存していない。

快山は、大悲寺九世、快童宗省（古月下）に嗣法し、住山数年にして元文元年（一七三六）十一月二十日に示寂した。

月船の法系は、誠拙周樗（円覚寺）、物先海旭（長松寺）、仙厓義梵（聖福寺）などのすぐれた法嗣によって一時、栄えたが、明治の末頃に絶法してしまった。

かつて東海昌峻について参禅した清見寺の坂上宗詮老師（越溪下）は、自叙伝「荆棘録」の中で、鎌倉禅は、一則の公案を以って修し禅定を第一とするもので白隠下の如く、公案体系もなく、また修業の順序がないので往々にして学者（雲水）を死水裡に瞎眠し去らしめる弊風がないわけではなかったと述べている。

月船系では、「見性十年、大事三十年」と唱えていたというから余りに禅定を重んじた為に、ついに絶法してしまっただと思われる。

白隠系の人々が月船の「鎌倉禅」を「一枚悟り」あるいは「鍋蓋禅」とけなしている点からもそれは窺われる。

①拙稿「近世後期に於ける鎌倉禅について―月船禅慧を中心として―」（禅学研究第七十三号）

②千葉県佐原市の清宮良造著（私家版）

③花園大学図書館蔵

④同右

⑤同右

- ⑥ 加藤正俊著『白隠和尚年譜』
- ⑦ 清宮良造著『大竜寺略記』
- ⑧ 「大悲寺什宝類和帖」
- ⑨ 「大悲寺過去帳」
- ⑩ 玉村竹二、井上禪定共著『円覚寺史』円覚寺、昭和三十九年
- ⑪ 同右
- ⑫ 雑誌「禅宗」連載、今井福山「誠拙禪師忘路集提唱」
- ⑬ 破有法王著『現代相似禅評論』、玉村、井上共著『円覚寺史』